

詩篇 121 篇

都上りの歌

《わが助けは何処より来るか》

- 1 私 は山に向かって目を上げる。私 の助けは、どこから来るのだろうか。
- 2 私 の助けは、天地を造られた主 から来る。

《夜番をなさる方》

- 3 主 はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。
- 4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

《昼も夜も》

- 5 主 は、あなたを守る方。主 は、あなたの右の手をおおう陰。
- 6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。

《とこしえの守り》

- 7 主 は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
- 8 主 は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

引き続き「都上りの歌」を学んでいきますが、今回は二つ目の「巡礼の旅の歌」に位置づけられています。本篇全体が「神の守り」で貫かれており、イメージとして、寂しく危険を伴うエルサレムへの道中何度も口ずさむ歌にふさわしいということでしょう。離散の民がエルサレムへ向かうとき、この時代は飛行機などありませんから、陸続きの地域はロバや徒歩で移動するほかなかったと思われま

色を付けているところを見ていただきますと、「私」「あなた」「主」という三者での対話のようになっていることが分かります。しかし、1～2節に出てくる「私」は、3～8節では自らの心に語りかける意味での「あなた」に置き換えられているようです。

詩人は荒涼とした山に目を上げ、「私の助けはどこから来るのだろうか」（1節）と自分に対して問いかけます。詩人の前に立ちはだかる山にはどんな獣が棲んでいるのかも分からず、狼の遠吠えに怯えながら立ち尽くしていたのかもしれませんが。夜の山影は不気味で、吸い込まれてしまいそうな近付き難さがあるでしょう。詩人は、自分を助ける方は「天地を造られた主」（2節）であると告白します。恐怖を吹き飛ばすかのように、この山でさえ創造主によって造られたものにすぎないことを確認しているのです。

神はそもそも眠る必要のない方ですが、その当然のことが「まどろむこともない」（3節、4節）、「眠ることもない」（4節）と、わざわざ強調されています。神がイスラエルの民を寝ずの番をして守られたという記事が出エジプト記にあります。

この夜、主は彼らをエジプトの国から連れ出すために、寝ずの番をされた。この夜こそ、イスラエル人はすべて、代々にわたり、主のために寝ずの番をするのである。（出12:42）

人間は肉体的に弱く、休息を取らなくては次なる戦いに出ていくことができません。しかし、神は24時間体制でご自分の民を守っておられるのです。寝ているときも安心だということです。

聖書には「右の手」（5節）という表現がよく出てきますが、右手は利き手であることが多く、力強さ、命の守護などを象徴的に表しています。その右手がダメージを受けることがないように、主は守っておられるというのです。キリスト者にとっては「神の武具」なる「御霊の与える剣である神のことば」（エペソ6:17）がそれに当たるでしょうか。

巡礼の旅は、「昼」（6節）は強い日照りによる日射病のリスク、「夜」（6節）は危険を伴う野宿と寒さ、野獣や盗賊が大敵となります。命がけで主の許へ向かう巡礼者たちを、主はどんなときも守ってください。私たちの礼拝へ向かう足をも主は守ってくださっているのでしょうか。万難を排して主の許へ辿り着けるように、平日の歩みをも支えてくださっているはずです。

「すべてのわざわいから」（7節）、「行くにも帰るにも」（8節）とは、全生活が主の守りの中にあるということ。それも、地上の歩みだけではなく「とこしえまでも」（8節）守られると言われています。生まれた日から人生を終える日まで、その間にある学校生活、家庭生活、社会生活のすべてが主の守りの下にある。贖われた人の人生は、救われた日から後だけでなく、それ以前の日々も祝福の下に置かれるのです。過去にどんなに辛い経験があったとしても、それすらも光と変えることのできる神様が私たちと共にいてくださいます。